

STAR OCEAN anamnesis -The Beacon of Hope-

[Novel]和ヶ原聡司 [Illust]大熊まい



© 2016-2018 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved. Developed by tri-Ace Inc.

第六章・希望の燈火・後編

レジスタンスの基地は、見る影もなく変わり果てていた。

灼死病血清の製造ラインを作っている工場区画が無事なことだけが救いだったが、宇宙基地で修理された艦も外壁がボロボロになり、生き残った誰もが疲弊している。

そこかしこにバーベットの死体が散乱し、さらに言えば死体はバーベットのものだけでもなかった。

件の大襲撃をなんとか撃退できた様子ではあるが、およそ勝利したと言える状況ではない。そんな状態だったから、私達が負傷したエルドラムを連れて帰って来ても、大きな驚きは起きなかった。

私達はエルドラムを艦に運び込み、疲れ果てた様子のレナに無理を言っ、治療紋章術による治療を施してもらう。

「見た目より深く抉られています。私の力だけで治るかどうか……」
全身埃だらけ、返り血だらけのレナの表情の険しさが、バーベットの襲撃の苛烈さを感じさせた。

「もう滅茶苦茶でしたよ。倒しても倒しても後から湧いてくるんです。フェイズキャノンは撃ち尽くしてしまいました」

地上の生物相手に戦闘艦のフェイズキャノンのエネルギーが枯渇するまで砲撃を繰り返す戦いとは、全く信じがたい話だ。

艦橋の片隅では、コロが真っ白になって転がったままピクリとも動かなかった。

なんでもエネルギーを節約するために、駆動素体を停止させて艦のコンピューター制御に切り替えたらしい。

面倒が少ないのでそのままがいいと思っていると、そこにリーシュに連れられたベルダがやってきた。

「艦長、みんな、無事で良かった」

そう言うリーシュの表情も、疲労の色が濃い。

リーシュに促され、レナの治療を受けるエルドラムの傍に、ベルダは腰を下ろす。

「一体何をやっておるのじゃ、この阿呆が」

「……ベルダ、か」

ベルダの声で目覚めたわけではないだろうが、いつの間にかエルドラムは目を開け、うつろな赤い瞳を少女に向けていた。

「さぞ、私を憎んでいるだろうな……」

「ああ、憎んでおるさ。泣きわめくわしをずーっと一人ぼっちのままほったらかしにして、一体今までどこをほっつき歩いておったんじゃ……」

「……くくく……すまないな。いつも仲間外れにして」

「お前とじいちやまはいつつもいっつもそうじゃった。わしを子供扱いして、大事なことはなーんにも教えてくれなかった。恨んでおるんじやぞ」

動けないのをいいことに、ベルダはエルドラムの額を平手で音が出るほどに叩く。

私達はその様を、ただ見ていた。

そうすることが、最も早く真実に近づく手段だと、誰もが分かっていた。

「艦長達の戦いを、コロを通して見た。エルドラムよ」

エルドラムは、ランビュランスが支配する宙域にCS計画による恐怖で圧政を敷いた独裁者は、まるでその問いだけを恐れているかのように顔をゆがませた。

「あの獣が、じいちやまなのじやな」

「……」

「何故隠しておった」

「あんな姿になった博士を、お前に見て欲しくはなかった」

「それが子供扱いだと言うのじゃ！！ わしは、もっと早くにそれを知っておれば、わしはお前さんに……！！」

「だから子供だというのだ。あれは、お前や、ましてや私の手に負えるものですら、ない」
「っ……………！！」

憑き物が落ちたかのような穏やかなエルドラムの言葉に、ベルダは詰まる。

「あれは……博士がパルスタワーの危険性を訴え、殺されたあの演説の場で、突然現れた」

「……なんじゃと？」

「博士に灼死病蔓延の罪を着せて、政権の延命を図ろうとする政府高官共の目の前で、博士の肉体が灼死病による死者と同じように高温で焼けただけ、急速に肥大化していった。異変に驚く暇もなく、あの場にいた者達が次々に灼死病の症状を急激に発症し、倒れた。博士を殺した政府高官共も集まった民衆も差別なく、な。その後、あれはまさしく生きた災厄として星中を、宇宙基地を、植民惑星を飛び回り、灼死病を蔓延させていく過程であの形状が定まった。博士が変異した場に居合わせ、博士を追って宇宙を飛びまわった私が病に侵されていないのは偶然でしかないが……その頃、博士に代わりパルスタワー事業の責任者になっていたおかげで、独裁には、これが大いに役に立ったよ」

「灼死病を寄せ付けない、パルスタワー建設事業の責任者……それで、あなたはCS計画を進めようとしたのね」

レナの問いに、エルドラムはうつろに頷く。

「そうだ。名誉を汚され死んだ博士に、これ以上罪を犯させるわけにはいかなかった。私は、博士がパルスタワー研究の間に灼死病に感染し、発症までの潜伏期間中にパルスタワーの超磁界によって灼死病が遺伝子変性を起こしたと考えた……変性を起こしても、灼死病である

以上は極低温下に置けば活動が停止する。そう考え、私は獣を追い詰め、クールドスリープさせることに成功し、いつの日か灼死病の特効薬が手に入ったときに、最初の被験体にするべく私の人生を賭けた大勝負を挑んだのだ……」

「人生を、賭けたじゃと？」

「博士の名譽を回復し……そして」

その一瞬だけ、エルドラムの赤い瞳に、野望に燃える男の光が戻った。

「灼死病の遺伝子変性を逆手に取り、博士を、生き返らせようとした」

「……」

「ベルダの泣き声が、ずっと耳から離れなかった……。あの日、博士が死を覚悟して真実を明らかにしようとしていたと、分かっていた。私は思ったよ。変異した博士の姿を見て、ああ、もしかしたらこれで、ベルダの下に博士を帰せるかもしれないと、博士の手で、あれを渡してもらえると……」

「何……を……バカな、ことを……」

それはエルドラムの、妄執と言ってもよかった。

嗚咽混じりのベルダは、エルドラムのその妄執を喝破するには優しすぎた。

「わしは……そりゃあ、悲しかった。じいちゃまがいなくなって、身が裂けるほど悲しかった……でも、何より悲しかったのは、一緒に泣いてくれる家族が、いなくなったことじゃ。エルドラム、わしのことを思うと言うのなら、どうしてわしから離れた。どうしてわしが寂しくて泣いておるとき、そばにいてくれなかった！ 何故！ どうして！！」

「ベルダ！？」

レナを押しつけて傷つくエルドラムに馬乗りになり、殴りつけようと振り上げた拳を、ベルダは振り下ろせなかった。

「どうしてわしなんかのために、CS計画などという下らぬことで、わしと同じ悲しみをランビュランス中に振りまいたんじゃ……」

「……私が、愚かだったからさ。お前と、博士さえいればよかった。他の者は、どうでもよかった。ただ、博士に、お前の下に帰ってほしかった。それさえ叶えば、命すらいらないと」

「愚か者っっっ！！！！」

ベルダの悲鳴と嗚咽を、エルドラムはただ受け止めた。

「そのために……そんなことのためにお前さんがいなくなってしまうたら、何にもならんじやろうがっっ！！ 意味がないじやろうがっ！！」

私達は、愛するがゆえにどうしようもなくすれ違ってしまった『家族』の姿を、ただ見守ることしかできなかった。

「優しさと引き換えに一生癒されない孤独をもらってしまったら、いつそ一緒に死にたかったって……思うわよね」

ぼつりと、ミュリアが呟いた。

「でも、それでもどうしようもなく大切なもののために、決して勝てない賭けだと分かっている命を賭けてしまう気持ちは、少しだけ、分かる」

クロードもまた呟く。

「どうしようもなく大切なものを、どうして人は、二つ同時に救えないんだろうね。そんなときの己の無力さに、狂いそうになることがあるよ」

ネルも、やりきれない思いを胸にそう呟いた。

孤独で愚かで優しい独裁者の独白は、ここで終わる。

「愚かな私の野望は、潰えたよ。もはやあの獣を再びコールドスリープさせることは不可能だ。あの極低温下で活性化するということは、ウイルス自体が進化しているのだ。宿主たる獣ごと、跡形もなく焼き尽くさなくては、また新たな灼死病の悲劇が、宇宙にまき散らされることになる……」

「……っ」

「今なら、まだあのパルスタワーにいるうちであれば、コールドスリープ機能を暴走させて封印し、倒すことも……がふっ……」

「もう喋らないで！ あなたの傷は深いです！ 艦長！ やはり私の力だけじゃ治療しきれません！ 艦のメディカルカプセルと併用で、リーシュさんとウイニーさんの補助を……」

レナがそう叫んだときだった。

艦橋の隅で真っ白になって転がっていたコロに突然色が戻り、アクの強い瞳を赤く点滅させながら叫んだのだ。

『警告！ 警告！ 転送反応を確認！ 転送反応を確認！ 次元移送空間形成！』

「まさかっ……！！」

エルドラムが吼えるのと同時に、それは艦のスクリーンに映し出された。

体表に禍々しい赤い筋が幾筋も走る白い獣。

巨大な角と、血の滴る罅、威嚇するようにうねる尾。

『ベルだ……べるだ……ベルだあああああああ！！』

「紋章転送だ……ウイルスが、そこまで進化するというのか……っっ！！」

「じいちゃま！！」

スクリーン一杯に映しだされたのは間違いなく、つい先ほどパルスタワー一号機で接触した獣の魔獣、ブラン・クレーマン博士の姿であった。

※

「動ける人は全員血清製造工場に避難するんだ！！」

クロードの警告が、どれほどの人に届いたかは分からない。

使用を恐れていた反陽子兵器セイクリッドティアを躊躇いもなく抜き払い、突如現れたクレマン博士の咆哮と血の光線を弾き飛ばしていた。

「マズいな……タイネーブ！ あれを！」

「ええっ！？ 冗談やめてくださいよこんな時につっ！」

クロードが指し示す方向を見たタイネーブの悪態が、ただでさえ悪化した事態が更に悲惨な状況に立ち至ったことを知らせてくれた。

バーベットの大群の、第二波である。

「クロードさん！ もう艦の大砲は撃てないんですか！？」

「さっきの戦いで使い切った！ エネルギーの充填なしにはもう無理だ！」

「もおおおおおお！！！」

タイネーブは気合いとも悲鳴ともつかぬ声で、両の腕から衝撃波を打ち出し小型のバーベットを一掃する。

「ここは私が食い止めます！ クロードさんはみんなを工場区画に！！！」

「分かった！ 少しだけ持ちこたえてくれ、すぐに戻る！！！」

議論の余地はないと踏んだクロードが了承し、

「アペリスのご加護がありますようにっ！！ おおおらああああっ！！！」

荒々しい祈りの文言とともに、タイネーブはたった一人、赤い巨童型のバーベットの群れに突撃してゆく。

「みんな走るんだ！ 足が折れても走るんだ！ ここにいたら助からない！ 僕が先導する！ 走れ！ 走るんだ！！！」

クロードが剣を振るい、タイネーブの猛攻を潜り抜けて殺到するバーベッドを屠りながら、避難する人々を先導する。

だが、避難する人々の数は、軽く見積もっても100人以上。如何にセイクリッドティアを振るおうとも、クロード一人で対処できる数ではない。

「立てっ！ 立つんだ！ あんたたちは国軍だろう！！ 軍は国民を、国を守るためにいるんだ！ 国を亡ぼすためにいるんじゃないっ！ 最後まで諦めずに戦うんだ！ あんた達が戦わなかったら、国もエルドラムも救えないんだぞっ！」

クロードは、道々でへたりこんでいるランビュランス兵一人一人に喝を入れ、時には負傷者を背負い、時には彼らを庇い敵を倒し、声を枯らして避難の誘導に務める。

その姿を見て奮い立った兵が一人、また一人と立ち上がり、クロードの指示に従い始めた。なんとか人々の被害に歯止めがかかりそうだと思えた次の瞬間、新たな絶望が押し寄せた。

『皆さん！ 第3波のバーベットの反応が、艦の5時方向から接近しています！』

ウイニーの警告に蒼白になりながらも、

「そっちは私が行くわ！ 悪いけど、後は頼んだわよ！」

ミュリアが杖を手に飛び出してゆく。

広範囲紋章術を使えるミュリアとはいえ、たった一人でどれほど持ちこたえられるか。

私はベルダの前に跪き、宣言する。

私達は、これからクレーマン博士を討つ。

すまない。

「艦長……！」

ベルダの答えは待たず、最後に私はリーシュとレナに、私達の生命線として艦に待機し、ベルダ達を守ってくれるよう頼む。

「ミュリアさんとタイネーブとクロードが持ちこたえてくれている間に、行きましよう、艦長、ネルさん！」

フィデルの後に続き、私もネルもクレーマン博士に向かって走る。

「艦長……！」

背後からリーシュの声が追ってきたが、答えることができなかった。

そうさせてくれない威圧感が、クレーマン博士にはあった。

『ベルダ……ベルダあああ！！』

まさしく血を吐くような呻き声そのものが、まるで壁の如く私達を打ち付ける。

暴れ回る尾も、まともに食らえば全身の骨が砕けてしまうだろう。

その上、クロードとタイネーブとミュリアが討ち漏らしたバーベッドにまで対処しなければならぬ。

状況は、絶望的だった。

「一撃でももらえば終わりだ！ 二人とも気合い入れな……！」

先制はネルだ。

紋章術、いや、施術で形勢された暗黒の刃がクレーマン博士の四肢を狙い放たれる。

獣の巨体がそれを回避しようとしたところを、フィデルの剣が大上段から叩きつけられ、

巨大な獣を地に伏せようとする。

「おおおおおおっ！」

だが、裂帛の気合いとともに振り抜かれたフィデルの斬撃を、クレーマン博士は耐えた。

フィデルの攻撃に合わせて放った私のフェイズガンは空を切り、代わりに血の光線がお返しとばかりに放たれる。

私は危ういところで回避するが、背後にあった工場区画の建物にフェイズキャノンで抉られたような穴が開き、背筋が寒くなる。

光線を放つために開かれた罅目がけて、ネルの刃から放たれる雷と、フィデルの衝撃波、私の収束フェイズガンが殺到するが、その全てを受けて、それが身を貫いてなお、クレーマ

ン博士は止まらなかつた。

「嘘だろ……!!」

普段決して弱音を吐かないフィデルが驚愕で一瞬足を止めてしまう。

クレーマン博士はそれを見逃さず、しなる鞭の如き尾をフィデルに向かってたたか叩きつけた。

「ぐああああっ!!」

直撃こそ免れたものの、衝撃と飛び散る地面の岩の欠片を全身に浴び、フィデルはたまらず吹き飛ばされる。

「フィデルっ!! あああっ!!」

着地の瞬間を狙われたネルも、無事では済まなかつた。

クレーマン博士の質量があると錯覚させる咆哮が、ネルの体を木の葉のように吹き飛ばし、凍り付いた地面に叩きつける。

尾と咆哮の追撃が二人に向かおうとする直前、私の放ったフェイズガンがクレーマン博士の左目を直撃した。

狙ってやったことではなかつたが、流星に目の強度はさほどでもないのか、一瞬動きが止まり、苦しげに呻きはじめる。

そこでフィデルとネルの体勢が整えられるだけの時間が稼げるかと思つたが、流星に目論見が甘かつた。

苦痛と怒りで暴れ吼えるその衝撃が辺りにまき散らされ、とても二人を助けに行くこともできなければ、二人が立ち上がる暇すら与えてくれない。

ダメージらしいダメージを全く与えられていないこの状況でバーベッドも次々に押し寄せ、一体どうすればこんな化け物を止められるのかと思つたが絶望に陥りそうになったそのときだった。

『が……ふっ!!』

突然、クレーマン博士の巨体が動きを止めた。

今まで何をやっても一瞬すら停止することのなかつたクレーマン博士が、まるで四肢を見えない鎖で緊縛されたかのように、痙攣させながら停止している。

生命活動が停止したわけではないのは、呻き声を洩らす口と憎悪に満ちた右目の様子からも明らかだ。

一体何が……。

「じいちゃま……見てくれるかの……じいちゃまが残した研究成果をいじくりまわして作った、わしのおもちゃを」

私は耳を疑つた。

ベルダだ。ベルダがこの戦場にいる。

リーシュとレナは何をしているんだ。

ベルダがクレーマン博士の攻撃に掠りでもしたら、とても無事ではいられないというのに。

『ぐ……が、あ……』

ベルダの小さな体は、クレーマン博士の巨体のすぐそばにいた。

手には、ショッキングピンクのオモチャの銃。

第二宇宙基地で私の背中に突きつけられた、落とすと軽い音がするあの銃だ。

「じいちゃまが作ったバルスタワー。エルドラムが立案したCS計画。わしが研究した灼死病。その全てが凝縮したこの銃の力、凄じやろ？ じいちゃまなら、褒めてくれるじやろ？」

ベルダの銃口は、クレーマン博士ではなくその足元に向けられていた。

銃口の向かう先には目に見えるほどのエネルギーが凝縮された超磁界のフィールド。

その最中で、クレーマン博士の足元が、少しずつ凍り始めている。

「敵を超磁界フィールドに捕らえて、灼死病が活動できない極低温状態に置き、凍り付かせるんじや。磁界フィールドは出力調整で、バルスタワーと同じくセンサーに検知されない妨害波にもなる。わしはこの銃を、マグネティカルージュと名付けた。格好いいじやろ」

『あ……あ……ベル……ベル、ダ、ベルダ……』

穏やかに語りかけるベルダの声に、クレーマン博士の憎悪が一瞬揺らぐ。

見るとベルダが作りだしたこの隙に、リーシュがフィデルを、レナがネルをそれぞれ安全な場所まで引きずりだして、即席の治療を施していた。

「じいちゃま、もう、終わりにしよう」

超技術が濃縮されたマグネティカルージュを構えたまま、ベルダは語りかける。

「あの日、じいちゃまが殺されたと聞いたあの日から、わしはみんなを恨んだ。ランビュランスなど滅びてしまえと願った。でも……その度わしは、わしが悪いことを考えると叱ってくれたじいちゃまの声を思い出した。それだけで、暖かい気持ちになれた。じいちゃま、わしは艦長達の言い付けを破って、危険な場所に来てしまった。じいちゃまが苦しむ姿をこれ以上見ていられなかったのじや。じいちゃま。じいちゃま。終わりにしよう。全部、全部、終わりにしよう。な？ じいちゃま、こんな姿でも、わしはまた、じいちゃまの声が聞けて嬉しかった。さようならじや。いつかまた、わしを叱ってくれ。いつものような優しい声で、こら、ベルダ、と……」

『ベルダ……ベルダ……』

ベルダは白衣のポケットから、マグネティカルージュより更に一回り小さな銃のようなものを取り出した。

それが注射用のアンプルが仕込まれたメディカルガンであることに、私は気づいた。

あれは、血清だ。

恐らく実験用に生成された、血清の第一号だ。

「博士、ベルダを褒めてあげてください……ほら、これが……」

エルドラムは、己を貫く異常進化の果ての肉の爪に、そっとメデイカルガン押し当てた。

「ランビュランスを救う光です」

効果は劇的であった。

『ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！』

メデイカルガンが注射されて一秒もしないうちに、エルドラムを貫いていた肉の爪がもがき苦しむようにして形を喪い、真っ黒に焼けただれて崩れ始める。

それと同時にクレーマン博士本体も、古い紙に火が付いたかのように虫が食うかの如く焦げつき崩れ落ち始める。

「エルドラムっ！！」

ベルダは崩れ落ちるエルドラムを倒れないように必死の力で受け止める、彼の体を抱きしめながら、クレーマン博士を焼き尽くそうとする血清の抗力を見つめていた。

「！！」

だが、徐々に肉体が縮み始めようとした次の瞬間、灼熱の獣の中から、荒たな、もはや既存の生命体のパーツでは有り得ない何かが質量保存の法則を無視したかのように出現する。

「まだ進化するというのかっ！！」

灼死病が抵抗しているのだ。

血清の抗原に対抗できる、新たな遺伝子を。

血清が病を焼き尽くすのが先か、病が血清の力に勝つのが先か、最早誰にも、どうにもできないうちかと思っていた。

「空破斬っ！！！！」

黄金の衝撃破が、新たに変性した異形の肉体の一部を跡形もなく消滅させた。

原子核すら残さぬその力の源が何なのか、考えるまでもなかった。

「クロード！！」

レナの声が、勇者の名を呼ぶ。

押し寄せるバーベットの波を切り拓き、レジスタンスやランビュランス兵の避難誘導を完了したクロードが戻って来たのだ。

クロードも、決して無傷ではなかった。

ジャケットは脱ぎ捨てられ、トレードマークのバンダナも破れ、額から激しく血を流している。

だが、クロードはセイクリッドティアを力強く握り、進化によって血清を倒そうとする灼死病に決然と向かってゆく。

迫る脅威を感じ取った灼死病が、新たな進化でクロードを貫こうとするが、クロードはその全てを難なく回避し、クレーマン博士の真上目がけて跳躍する。

「これで終わりだ……燃えろツツツ!!」

クロードの剣から、黄金色の闘気がクレーマン博士に降り注ぐ。

反陽子兵器から放たれた闘気は、歪みから生まれた麒麟を細胞の一片まで逃すまいと包み込む。

『ベルダ……ベルダ………べ……ル……』

「じいちゃま……」

遂にその肉体を完全に焼き尽くした。

そして。

「ベル……ダ……」

「じいちゃま……じいちゃま!?!」

「は……かせ……」

後に残ったのは、小柄で、朴訥な一人の老人であった。

ベルダがエルドラムに肩を貸しながら、忌まわしき獣の穿った破壊の痕に倒れる老人の傍らに、必死で駆け寄った。

「見事……じゃったぞ、ベルダ」

「じいちゃま、じいちゃまなのか!?!」

「すまなかった……寂しい思いをさせた……エルドラムにも、いらぬ苦勞をかけてしまった」

「……いつもの、ことでは、ありませんか……がっ」

「エルドラム!?!」

元から致命傷を負っていたエルドラムだ。

遂に支えきれなくなったベルダの肩から崩れ落ちたエルドラムは、ベルダの祖父、ブラン・クレーマンの隣に横たわる。

「エルドラム、じいちゃま!!」

「見ておったよ。凄いやないか。変異した灼死病すら、制する血清を作ってしまうとは……」

……さすがは、わしの孫娘じゃ」

「じいちゃま……わし、何も……全部、仲間の、みんなの力で……」

「こらベルダ」

やさしい老人の叱責に、ベルダは一瞬だけ、きよとんとした顔になる。

「謙遜は度が過ぎれば嫌味になるぞ? お前さんの努力の土台があったからこそ、助けを掴

みとることができたんじゃないや……それは……誇れ……じいちゃまに、誇らせておくれ……素晴らしい、孫娘を……」

「じいちゃま、それは、うん」

「よくやった。お前は、わしの、誇りじゃ」

震える手がベルダの髪を撫でようと持ち上がる。

「じいちゃま？」

そのとき、クレーマン博士の腕が淡い光に包まれ始めた。

「ああ……すまないベルダ。また、寂しい思いをさせることになりそうじゃ……」

「……安心してください、博士。ベルダは、強い子です、もう、子供ではない……星を救う、立派な科学者です」

「じいちゃま？　じいちゃま！　嫌じゃ！　エルドラム！　二人とも、またわしを置いて行くつもりか！！　嫌じゃ……嫌だ！！　行かないで！　嫌だ嫌だ嫌だ！　行っちゃ嫌だよおー！！」

「ありがとうよ、ベルダ。こんなわしらのために、涙を流してくれて」

「博士の、志を、覚えている、だろう。ベルダ。生きて、進んでくれ……宇宙に流れる涙を、1mでも、少なくするために、お前の力を……私は、その主義に反してしまった。これから、その償いをしてくるよ」

「わしらは、見ておるよ。いつか、遙かなる時の彼方でまた出会ったとき、またわしに、お前さんは自慢の孫娘だと胸を張らせておくれ……」

「じいちゃま！！」

光の奔流は、一瞬にしてクレーマン博士を包み込んだ。

ベルダの髪にかかっていた微かな重みが消え去り、エルドラムすら包み込んだ光は太陽のように強く、優しくベルダの周囲を巡り、そして、弾けて消えた。

へたり込んだベルダは、光の残滓を見上げ、

「じいちゃま……エルドラム……」

優しさと孤独を残し、行ってしまった家族を思い、ベルダは大粒の涙を零した。

終章

ランビュランス本星に降り立って、3ヶ月が過ぎようとしていた。

エルドラムの急死によって発足した暫定政権は、灼死病血清の存在を軸に安定的に出発し、CS計画の順次凍結を発表した。

『コールドスリープ計画を凍結』の実態は凍結したものの解凍なのだが、とにかく血清の増産体制を構築するメドが立ったのは、旧レジスタンスと暫定政権の努力の賜物であると同時に、エルドラム政権下での医療工業分野への設備投資が潤沢であつたおかげであつた。

エルドラムはエルドラムで灼死病に病理的に対抗しようとしていた、というのが世間の見解だったが、真実はきつと違うだろう。

ぎりぎりまでCS計画の対象にならず、政治的軍事的に回避されていた第二宇宙基地。

エルドラムはベルダが灼死病対策に成果を出すことを、信じていたのではなからうか。

そうでなければ13歳の少女の研究チームなど、とつくの昔に解体されていたに違いない。ベルダが成果を出したときのための下準備を進めつつ、クレーマン博士の汚名を濯ぐためにパルスタワー一号機に変異したクレーマン博士を幽閉し、一方でCS計画を進めることで己の恐怖の独裁者としての既成事実を積み重ねてゆく。

そんなときに、私達が現れた。

ランビュランスに対抗できる科学的背景と実力を持った我々を、エルドラムは巧妙に迎え入れ、後を追わせた。

ファブリークや暗礁地帯で航跡をトレースできたのも、もしかしたら私達をランビュランスに誘導するためではないだろうか。

ヴィレで私達の動きは察知されているだろうとクルトは言っていたが、最終的にベルダに接触した私達は、無事に彼の政権を打倒するための力を備えることができた。

「不器用で、愚かで、人の心の分からんやつじゃ……」

エルドラムが残した遺言のファイルを見たベルダは、そう吐き捨てた。

遺言には、自分がクレーマン博士に罪を着せ、灼死病の血清を独占してより独裁を強固なものにしようとしていたことを発表してほしい旨、記載されていた。

独裁政権を倒したのはベルダとレジスタンスと、そして異星からやってきた私達。

いつか来るであろう遠い銀河の先進惑星勢力との接触に備え、その事実を歴史に残すこと。80年間に渡る歴史的な凍結が真に解凍されるには、膨大な時間がかかる。

他勢力とのファーストコンタクトが起こったとき、異星からやってきた私達が政情の安定に関与した事実は、ランビュランスの未来に利するものとなるだろう。

「でも、これじゃあエルドラム一人が悪者じゃない！」

リーシュはエルドラムの遺志の遂行に最後まで反対していたが、エルドラム本人と、ベル

ダがそれを望んだ以上は口を挟むことはできなかった。

「ですが、本当に全ての真実を明かしてしまえば、ランビュランスは分裂します。クレーマン博士に罪を着せた旧政府高官が再び台頭してくるかもしれません。今の暫定政府はエルドラム独裁政権とレジスタンスの連立だからうまく行ってるんです。抵抗勢力が悪の親玉を倒し、悪に従わされていた者達と和解して新たな未来に歩き出すという姿が、最後の世が安定すると、エルドラムは分かっていたんです」

「コロ！ あんたこういうときだけ物分かりが良いこと言わないでよ！ いつもならむむむ、許せません！ とか言うところでしょう！」

「そ、そんなあ……だって、ベルダさんがそう言うんじゃ……」

「そんなものさ。万人が望む形の平和なんて有り得ない。和解したって、過去の悲劇が無かったことになるわけじゃないんだ。犠牲になった命が何の意味も無かったような虚無感も、平和な未来を得るための代償の一つなんだよ。きつとね。納得は、できないけどさ」

達観したようなネルの言葉に、タイネーブが神妙な顔で頷く。

「沢山犠牲が出ました。平和になっても、命は帰って来ません。でも、先に進むと決めたなら、優先されるのは生きている人の未来なんです。悔しいですね。でも、ベルダさんがそう決めたなら、私達はもう……」

「命がけの覚悟って、重いよな、勝手に死なれて勝手に託された側はたまったもんじゃないけど。それでもベルダはよくやってるよ」

「そうね……やっぱり、せめて予め全てを話してほしかったとは思うけど」

「だとしても、きつとエルドラムは話すことはできなかったんだと思います。話せば、きつと託せなくなってしまうから」

クロードとレナも、そしてウイニーも、忸怩たる思いをなんとか抑えようとしているのが手に取るように分かる。

「それでもエルドラムは、ベルダに真実を知る機会を残し、きちんと伝えた。あの子が憎しみと絶望に囚われることがないように手を回したことだけは、褒めてあげていいんじゃないかしら。憎しみと絶望は、真実を見る目を曇らせるから……」

オペレーター席に座ってこちらに背中を向けているミュリアは、小さく溜め息を吐く。

「この先、ベルダに寄り添ってくれる誰かが、きつと本当にベルダを救う人なんだと思います。僕らは、命を守ることしかできなかった」

フィデルが自分の右手を見ながら、悔しそうに呟く。

「でも僕らはもう、これ以上ベルダに寄り添うことはできない……残念です」

それぞれに、悔悟も、残した思いもある。

だが我々はもうこれ以上ランビュランスに留まることはできなかった。

理由は我々の武力と、私の体の血清だ。

新政権の滑り出しは総合的に見れば順調ではあるが、それでも火種が無いわけではない。独裁政権の非道が一部罰せられないことに関する不満や、血清接種の順序について、既に新たな争いの芽が生まれようとしている。

そんな折、異星の武力たる我々の存在は、それだけで一つの圧力に繋がる。

今は元レジスタンス勢力が血清製法と我々の武力を独占している状況にあり、これでは旧独裁政権勢力との勢力均衡が保てなくなる。

旧独裁政権が元レジスタンスを圧倒するような勢力を維持していないのはもはや自明。

新たなパルスタワー建設計画の中止と既存のパルスタワー除去の約束を取り付けた今、我々の新体制の監査役としての立場も終わりつつある。

そうなれば、GFS S・3214Fは、本来の航行ルートに戻らなければならない。

即ち、地球へ針路を取る。

今日、私達はランビュランスを後にする。

「艦長」

そのことを最初に告げたベルダが、見送りに来てくれていた。

「ベルダ……」

「リーシュ、なんというシケたツラをしておるのじゃ。旅立ちにそんな不景気な顔をするものではないぞ」

「……うん、そうね、ごめん。これじゃどっちが子供か分からないね」

「にやつはっは。わしはじいちゃまのおかげで、昔からジジ臭いと評判だったからの」

「ふふ……これから大変だと思うけど、ベルダならきつと乗り越えられると信じているわ」

「うむ。任せておけ」

ベルダは小さな拳で、どんと胸を叩く。

そして、

「あれ？」「あら？」「えっ？」「ベルダちゃん？」「んん？」「ベルダ？」「おや？」

そのままリーシュの前を横切ると、レナの隣に空いていたクルー席に座るではないか。

その自然な行動に、私もリーシュもフィデル達も目を丸くしていると、

「ええーと……ベルダ・クレーマン。GFS S・3214F乗員として登録完了です、はい」

コロが申し訳なさそうにおずおずとそんなことを言い出すではないか。

「はあっ！？」

リーシュが素っ頓狂な声をあげ、今回ばかりは私も追従する。

そんな話は聞いていないぞ。

「はい、話してません」

お前は艦のAIとして艦長権限を何だと思ってるんだ。

「だ、だってえ……そうしないとあんなことやこんなことするって脅されてえ」

脅しに屈する戦闘艦AIがいてたまるか。

「時空転移紋章術。灼死病抗原を作りだした紋章術。人よりも感情豊かなAIを作る科学力。銀河連邦という広大な世界。そんなものを目の前にぶら下げられて、わしがそれをおめおめと逃がすと思うてか。わしはお前さん達に食らいついていくと決めたんじゃ!」

「だ……ダメダメ! 却下却下きやあああつか!」

「にやははは、わしはエルドラムやじいちゃまよりも頑固で通っておつてな」

「あのねえ!」

「……リーシュ、それに艦長。わしはもう、この星に頼れる者は一人もおらん。エルドラムもじいちゃまも、宇宙の涙を減らしてくれという願いをわしに託した。その願いをわしに叶えさせてはくれんかの」

シートに膝立ちになりながら、ベルダは私をまっすぐ見上げる。

私はしばしその瞳を真っ直ぐ見返し、そして、すぐに根負けして肩を落とす。

ベルダが良いと言うのなら、いいのではないか。

「いい、いいの艦長」

良いも悪いも無い。唐突に仲間が増えるのはこの宇宙の旅の宿命だ。

血清製造の方法や、ベルダ、クレーマン博士、エルドラムの研究データは既に科学者チームに渡っているし、ベルダ一人残して行くのは誰もが不安に思っていたことだ。

そんな状態で本人と一緒に来たいと言うのであれば、もう止める理由はない。

「やったぞ!!」

ベルダは満面の笑みを浮かべて、シートの上で跳ね上がる。

その足元を見て、フィデルがあることに気づいた。

「ベルダ、そのスリッパは?」

以前はそんなものは履いておらず、擦り切れたスニーカーだったはずだが、今のベルダの足元は、真新しいバーニイモチーフの女の子らしい暖かそうなスリッパに代わっていた。

「ああ、フィデルよ。これはお前さんと艦長が救い出してくれた、じいちゃまとエルドラムの想いじゃ」

「え?」

「暗礁地帯の座礁船から救い出してくれたじゃろう? じいちゃまの、わしへのバースデープレゼントじゃ。死を覚悟しての最期の贈り物のつもりだったようじゃ。箱の裏に、そう書いてあった。脱出の際に持ち出せなかったそうじゃが、パーチェのパルスタワーでじいちゃまが試行錯誤してレプリケートしてくれたものじゃ。それにエルドラムがそれらしくラッピングをして……」

そのとき、私は思い出した。

死の間際、エルドラムがベルダに何かを渡したいと言っていたことを。

まさかそれが、このバーニスリッパだったというのだろうか。

「これは、わしの家族の贈り物じゃ。それに足元を支えられて、今日旅立つ。のう、艦長、リーシュ、コロ」

ベルダは、艦橋に集う一同を順繰りに見る。

「フィデル、ミュリア、タイネーブ、ウイニー、ネル、レナ、クロード……」

堂々と物事を推し進めるベルダが珍しく気恥ずかしそうにスリッパの爪先でとんとんと床を突き、少し顔を伏せる。

『仲間』も良いんじゃが、その……ええつと、皆さえよければ、その」

「……どうしたの。らしくないわ、はつきり言ってみて？」

リーシュがベルダの前に立つと、ベルダは決然と顔を上げて、言った。

「皆さえよければ、わしの家族になって……もらえんじゃ……ろうか」

決然と言ったものの、だんだん尻すぼみになる語尾。

ベルダの唐突な申し出に一瞬呆気にとられる一同だが、私は艦長席を立つと、リーシュの隣に立ってベルダを見下ろす。

そして、言った。

こらベルダ、と。

「っ！」

堂々としているベルダが皆好きなんだ。

この艦の癖の強い連中と一緒に過ごすなら、望みを声に出すのにそんなことじゃだめだ。いつも通り堂々と、言いたいことを言ってくれ。

私達は、それを全力で受け止めるから。

「……………うむっ!!」

こぼれそうになる涙をこらえ、ベルダは笑顔になって、大きく頷いた。

さて、そうと決まれば、急いでベルダのための生活スペースを整えねばならない。

私達も少しずつ所帯が大きくなって来ているから、一度皆で話し合って、艦内の生活環境を整える必要があるだろう。

ランビュランスの宙図を参考に次の補給ポイントとなる惑星は既に目標に設定されている。

それまでに、順次、環境改善計画を練って行こう。

さて、そろそろ予定されている出発時刻だ。

ベルダもとりあえず、レナの隣でハーネスを締めてもらいたい。

「了解じゃ!!」

「お隣、よろしくね、ベルダ」

「よろしく頼むのじゃ!!」

隣り合ったレナと握手をしたベルダは、ふと気づいてレナに尋ねた。

「そう言えば、この船の名は何というのじゃ？」

「え？ 船の名前？」

レナは少し戸惑って私を見る。

G F S S 3 2 1 4 F 深宇宙探査戦闘艦だ、と答えると、ベルダは首を横に振った。

「型式の話ではない。船の銘のことじゃ」

「ああ、つまりエマーソンさんのチャールズ・デイ・ゴールみたいなあれですね」

フィデルがそう言うのと、皆が口々に知っている艦の名らしきものを披露しはじめた。

「私の仲間の船は、ディプロって名前だったよ」

「私の仲間の船はアキュラと、あとカルナスって言ったかしら」

「えっ？ 僕が乗ってた船もカルナスなんだけど……」

「へえ、そういう偶然ってあるのね」

「偶然……なのかなあ」

「とにかくそういう名じゃ。何かないのか」

私がコロを見ると、コロは若干恨みがましい口調で言った。

「艦長、そういうの面倒だからつけなくて昔仰ってましたよ。僕は宇宙を駆け巡るスーパ

ーマシンみたいな格好いい名前つけてほしかったのに」

そう言えば、通信では型式でも通じるからと、艦長就任時に適当に処理したのだった。

「良い機会ですから命名しますか！？ どうしますか艦長！ 折角ですからこの宇宙の旅に

欠かせない要素を取り入れたいですね！ スーパーコロ号とかどうですか！？ それともウ

ルトラコロ号、いえ、この際スーパーデリシャスウルトラグレートアトミックコロ号なんて

のも……」

はじけるコロの声を押しつけて、それは静かに皆の耳に入ってきた。

「リュミエール号、というのはどうじゃろう」

「ええっ？」

「この船は、わしにとって希望の燈火じゃ。お前さん達は、ランビュランス人の救いを求め

る声を出してやって来てくれた希望の燈火。それにちなんだ名、リュミエール【燈火】が良

いと思うのじゃが」

「賛成です！」

「希望の燈火……素敵ですね」

タイネーブとウイニーが即座に賛同し、残る皆も口々に賛意を示す。

「……………はい、じゃあ当艦の愛称は、今日からリュミエール号ということでしょう。でもこ

れはあくまで愛称ですから。連邦艦艇の通称は所属宇宙基地にきちんと届け出ないと正式な

ものにはなりませんから。僕はS D U G Aコロ号を諦めてませんから！」

「いじけないの。大人気ない」

スネるコロをリーシュが慰める姿に苦笑しながら、私は艦長席に表示された『リュミエール』の名を指先で撫ぜる。

希望の燈火を紡ぎ空を駆ける船、リュミエール号。
なかなか悪くない。

G F S S 3 2 1 4 F改めリュミエール号のエンジンに火が灯り、いよいよランビュランスを後にする瞬間が迫る。

リュミエール号のクルー達、これからも長い付き合いになると思うが、よろしく頼む。

「はい！」

「ええ」

「お任せ下さい！」

「精一杯頑張ります」

「ああ」

「よろしく願います」

「こつちこそ、よろしく」

ミュリアとクロードのオペレーションで軌道計算が終了し、コロが発進ショックエンスを整える。

コロの合図とともにリュミエール号はランビュランスの基地を発進し、艦橋にGがかかり始める。

「次の星には、何が待っているのかしらね」

リーシュの期待に満ちた目が見るものが素晴らしいものであればいいと、私は心の中で密かに願い、

「まだ見ぬ世界を求めて、出発じゃ！！」

歓声を上げるベルダの元気に背中を押されるように、リュミエール号はぐんぐん上昇し、やがてランビュランスの引力を振り切り大気圏を抜ける。

「システムオールグリーン。亜空間ワープドライブ起動」

私はコロの提示するデータを元にワープショックエンスを起動し、新たな目標に向け、星の海を飛ぶ号令を下した。

「旅の始まりです！」

リュミエール号が唸りをあげ、亜空間ワープホールへと突入した。

その航跡がランビュランスの上空に蒼い光の尾を引いたとき、星の海は、再び静かに時を刻み始めたのだった。